

はちす葉は

(甲府魚町二丁目小林靜軒方)
丁みれ會詩稿

鱧丸千代子

月つきやどるこの白玉しらたまを蓮葉はちすよに

天あまつ少女をとめのいつ忘れわすれけむ

朝あしたには朝日あさひをわて、夕ゆふべには

霧きりふきかけて堇すずれもる哉かな

(學校の妹より堇を頼みおこせしかへし)

堇園

行ゆけよ行ゆけ我が敷島しきしまのますら雄をが

最後さいごの平和へいわ作る此この秋あき

村松下枝

淋ましげにふりしく雨あめの名残なごりとめて

今日けふはれやらぬ中秋ちゅうしゅうの空そら

父ちちよ戀こひしちよ戀こひしとうたひつゝ、

十年ととせの秋あきを夢ゆめと過ぎすけり

(十月五日父君の十年忌にあたりて)

うきにつけやすきにつけて父君ちちきみの

いまさばとのみ偲しのばるゝかな

伊藤うた子

吹ふくとしもえ知らぬ風かぜに白梅しらうめの

かをるか春はるの奥津城おくつじやうどころ

(人の頼みに任せて)

長谷川みつ子

皇軍みいくさの門出かどでにせしが結むすびたる

門かどの柳やなぎに秋あきの風かぜふく

跡部富士子

見みわたしの田たづらはなみのたしなべて

夕風ゆふかぜさむし水みづのほとさびし

秋風あきかぜのまゝになびける賤しづが家やの

煙けむりもさびし夕ゆふぐれの空そら

西川靜江

いくとせを郷の友ひとりはしなくも

語りあかしし秋の月さよさ

勇しくさかまく浪を分け分けつ

旅順港口いま行く帆かげ

青木とし子

月わかく虫なきささる萩原の

はらのもち方尼おはす家

野口ふみ子

さよ更けてふみ讀む窓に聞ゆなり

秋をさびしさ男鹿の聲

秋山きん子

賤の女が糸くる小屋の夜のまどに

人まつ虫の聲あはれなり

長坂末子

あつと弓やはたの神に祈らまし

軍さ幸われ吾が兄吾が友

日の本は神まもる國花の國

進むいくさにかちどきつゆく

春の舎

かいやさの海を染めつゝ昇る日の

色にもまさる大和國民

さた子

村雨よいたくな降りそ我が庭の

眞萩しら萩しはれやすらむ

白ふぢ

甲斐が嶺の出版をきいてたゞに嬉しく

いく度か折りてすてけむ似非歌の

筆またとりつ甲斐がねの月

梨子

道のべを馬にふまけてひめゆりの

匂ひあせてけり花遊きてけり

みどり

夏草の中に一もと選まれて

み座美しき姫百合の花

みぎは

降りしきる雨もをやみて光みつ

庭にいとしのさ百合一本

さくらら

うるさしとさわぎしあめもいつかやみて

小窓のあたり光さやけし

しらは桃

大空にかゝみと見えてすみ渡る

かげさやかなり月の小波

賤が家のま垣さびしく一本の

ひともとさびし白菊の花

撫子

そよ風にちり行く一葉ながめては

なほしのばるゝふるさとの秋

山吹

野の末を一人さびしと見えにけり

誰をやまねくをばなほすすき

萩子

なき父の奥津城訪ひし折からに

わはれを添ふる鐘の夕暮

来て見れば手向けてありし白菊の

誰が心根か嬉しかりけり

春子

萩の葉のそよ音さへ聞えさきて

心地さやかなり秋のはつ風

いま子

秋風の音さへさむくなりけり

夜すがらゆらぐ庭のいと萩

夕闇を白き窓掛さとゆれて

風にひとしきり琴の音さこゆ

今宵また友がみ墓に物いひて

暫しの夢を忍びて泣きぬ

今宵照るこの月影よ永久に

さへぎる雲のそれなかりせば

露に遠くとほく翁の影さえて

夢山あたりたゞはの暗さ

秋風にやがて行かむす水草の

幸にも似たりわが身いく年

こゝを夕暮母やいとしの海路山路

ねぼろの果てに夢とまがきつゝ

枯れくの虫のなく音にあこがれて

月いづる頃を一人さ迷ふ

人の植えし花も枯れたり人の灑さし

水も洒れたり今日この夕暮

面かげを草にゑがきてしまらくを

香の烟にあはれ咽びけり

フレーベル會俳句端書集

一、課題 冬季雜吟 一人十句以下

一、締切 十二月二十五日限り

一、披露 明治卅八年二月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にてても投吟する事を

得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)